大学生の読書経験と文章理解力の関係

The relationship between university students' reading experiences and reading comprehension

澤　崎　宏　一

Koichi SAWASAKI

『国際関係・比較文化研究』第10巻第２号（2012年３月）抜刷

大学生の読書経験と文章理解力の関係

The relationship between university students' reading experiences and reading comprehension

澤　崎　宏　一　　Koichi SAWASAKI

1．はじめに

読書経験と文章理解力との間に正の相関があることについては、先行研究により知られている。しかし、ひとくちに読書と言っても、小説から雑誌、インターネット、マンガに至るまで、その種類は様々であり、何をもって読書と定義するのか、判断が難しい。本稿では、大学生の文章理解力が読書習慣や経験とどのように関係するのかについて、読書の種類や頻度、方法、さらに大学以前の読書経験などの観点から調査した。調査は、主に大学１，２年生80人を対象に、アンケート方式で行った。その結果、次のようなことが分かった：ⅰ）大学生は日常的にかなり高頻度でインターネットから文章を読んでいるが、読書好きであることや文章理解力の高さと相関が強いのはインターネット・雑誌・新聞・マンガではなく小説などの文庫本の読書量である；ⅱ）新聞やインターネットの記事を精読するか飛ばし読みするかというような読み方は、文章理解力とは必ずしも相関しない；ⅲ）各人の読書習慣は小学校から大学まで一貫して同じではないが、各時期の読書習慣を総合して文章理解力と比較したとき、（それぞれの時期毎に比較するよりも）両者の間に強い相関関係が見られる。以下、次節で先行研究を紹介し、３節で調査方法と結果を示す。続く４節では考察を論じる形で、調査の結果を示していく。

2．問題の背景と所在：大学生の読書習慣に関するこれまでの研究

大学生の読書習慣に関する研究は、読書量が学生のどのような能力（学業成績、読解力、一般知識量など）と関係しているかを調査したものが多い。例えばGallik（1996）は、米国の大学生139人を対象にしたアンケート調査により、教科書以外の趣味のための読書時間、雑誌や小説など読書媒体の種類、学業成績（GPA）等の間の相関関係を測った。その結果、学期期間中よりも休み期間の方が読書時間が長く、休み期間中の読書時間とGPAの間に弱い相関関係が確認された。読書媒体は、雑誌や

メール・手紙に目を通す頻度が一番高く、次に新聞、インターネット、小説の順番で読書頻度が下がっていった。さらに、1年生に比べて4年生の方が読書時間が少ないことなども指摘された。この調査では、読書時間とGPAの間に弱い相関関係しか見られなかった。このことについてGallik（1996）は、個々人の読書習慣は大学入学以前に確立され、大学入学後は趣味の読書よりも学業のための読書に時間が費やされるため、教科書などの読書量を問うていないGallik（1996）のアンケートでは、学業との相関関係が明確になりにくいと考察している。

Gallik（1996）は米国の大学生を対象としたが、日本の大学生を被験者として行った調査では、平山（2003）がある。平山（2003）は、東京周辺の女子大学生208人に読書習慣（読書歴、読書頻度、本屋や図書館に通う頻度、蔵書数など）、読書や本に対する考え方、出版用語（ISBN、奥付、帯など）、漢字知識などを問うアンケートを行い、それらの相関を調査した。その結果、中学高校といった大学入学以前の読書量が、大学入学後の読書習慣に強く影響していることが確認された。これは、高校卒業以前に読書量が多いと、大学入学以降も読書量の多さにつながりやすいことを示している。しかし、読書習慣と出版用語や漢字の知識との相関関係は、特に認められなかった。

上記のGallik（1996）や平山（2003）は、読書量を測る手段として読書に費やす時間や読んだ本の冊数などを分析データとして扱っているが、これとは異なり、作家や雑誌の名前をどれほど知っているかということを、読書量を表す指標として試みた一連の調査もある(Stanovich and Cunningham, 1992; Stanovich and Cunningham, 1993; West and Stanovich, 1991など)。Stanovichたちは、読書量を客観的に測る手がかりとして、読書量や読書時間を直接尋ねる代わりに、メディアに関する知識（作家の名前、雑誌・新聞の名前、テレビ番組の名前、テレビ有名人の名前、映画の知識など）や選好性（テレビが好きか、読書が好きか、好きな作家は誰かなど）を米国人大学生に質問して読書指標とした。そしてこれらの読書指標を、知的理解力（学業成績、分析能力、空間理解など）、言語スキル（語彙、スペル、文章読解力など）、一般知識（一般常識、文化・歴史的知識など）のテストの得点と比較して分析している。その結果として次のようなことが報告された；（1）読書指標と学業成績（GPA）の間には相関が見られなかったが、テレビに関する知識を除いた読書指標は文化・歴史に関する知識と相関が確認できた（West and Stanovich, 1991）；（2）読書指標は、語彙、スペル、文章読解力などの言語スキルと相関しており、また歴史・文化などの一般知識とも相関が認められた。読書指標の中でも特に作家認識度や雑誌認識度、好きな作家を即座に挙げられるかなどが信頼性の高い指標であった（Stanovich and Cunningham, 1992）；（3）一般知識は、読書指標と比較的高い相関関係が得られたが、一般知識とテレビ経験との間には相関が確認できなかった（Stanovitch and Cunningham, 1993）。

上記の知見から共通して言えることは、読書経験は、学業成績とは関係が薄いものの、文章読解力を含む言語スキルや教養的知識の量とは深く関係しているということである。また、大学入学後の読書量は、高校以前と比べると落ちることがあるが、高校までの読書量とある程度比例していることもわかる。

しかし、平山（2003）を除き、上述の先行研究は北米の学生を対象とした調査であるため、日本の学生についても同じ事が言えるのかを判断する材料は乏しい。また、日本人学生を対象にした平山（2003）の調査以来、国内外で携帯電話やインターネットの機能は進化し続け、携帯小説やブログといった新しいジャンルの読み物に若者が触れる機会がより一層多くなっている（府川, 2009）。さらに、子供だけが読むものとはもはや言い切れなくなったマンガも、読書研究における読み物のジャンルとして確立され始めており（大塚・ササキバラ, 2004; 鄭, 2009）、改めて、読書の媒体やジャンルに応じた読書習慣の調査が求められていると言えよう。

3．調査方法と結果

3.1 調査の目的

前節最後で述べた問題点を踏まえ、本研究では次の3つの課題をたてて、大学生の読書習慣と文章理解力との関係について、アンケートによる調査を改めて実施した。

（1）調査課題

a．読書の種類が多様化している現在、読書媒体の違いは、大学生の読書習慣や文章理解力とどのように関係しているのかを調べる。（調査1）

b．新聞やインターネットにおいて、精読や飛ばし読みなどの読み方の違いは、文章理解力とどのように関係しているのかを調べる。（調査2）

c．大学入学前の読書経験は、大学での読書習慣や文章理解力とどのように関係しているのかを調べる。（調査3）

本研究は探索的な性格が強いので、上記（1）に対する具体的な予測は持ちにくい。しかしながら、調査1と調査3に関しては、先行研究の知見から少なくとも次のような予測が可能であろう。

（2）a．大学生は、読書量が多いほど、文章理解力も高いだろう。（調査1の予測）

b．個人の読書習慣が小学校から大学まで一貫したものであるなら、大学生の文章読解力は高校以前の読書頻度とも比例しているだろう。（調査3の予測）

c．もし大学入学後に読書量が減少する傾向があるなら、文章理解力は、大学での読書量よりも、高校以前の読書習慣との方がより深い関係があるだろう。

（調査3の予測）

3.2 調査1：調査内容と結果

この調査では、読書媒体の違いと大学生の読書習慣や文章理解力との関係について調べた。

調査参加者　静岡県立大学に在学する日本語母語話者80人（女性70人；男性10人）が調査に参加した。平均年令は19.13歳（SD：0.97）で、殆どが1，2年生対象の日本語学や日本文化に関する授業を履修していた（但し、3年生が80人中10人含まれていた）。

調査項目　読書媒体に応じた読書習慣と文章理解力との関係を調査するため,下の（3）と（4）に示す項目についてアンケートの設問を用意した。右に付された設問番号は、実際のアンケートにおける設問の番号と対応している（図1および図2）。設問ごとに、読書量や文章理解力の程度を1から7までの評定値の中から選ぶ形となっている。

（3）読書媒体の種類を問う設問：

a．文庫本　（設問A2）
b．インターネット　（設問A3 a）
c．新聞　（設問A4 a）
d．雑誌　（設問A5）
e．マンガ　（設問A6）

（4）文章理解力を問う設問：

a．読みの速さ（自己診断）　（設問B7）
b．理解度（自己診断）　（設問B8）
c．センター試験の国語の得点率（現代文のみ）　（設問B9 a）
d．模擬試験の国語の得点率（現代文のみ）　（設問B9 b）

図１．読書媒体に応じた読書習慣を問う設問一覧

A. あなたの今の読書習慣についてお尋ねします。

1 日本語で書いてあるもの（本、新聞、雑誌など）を読むのは好きですか、嫌いですか？

とても嫌い		どちらかと言えば嫌い		どちらかと言えば好き		とても好き
1	2	3	4	5	6	7

2 通常（試験前など、時間の余裕がない時を除く）、日本語で文庫本（小説など）だとどのくらい読みますか？

1年で1～2冊以下		1～2ヶ月で1冊		1～2週間で1冊		1～3日で1冊
1	2	3	4	5	6	7

3 通常（試験前など、時間の余裕がない時を除く）、携帯やインターネットで記事やブログなど、日本語で文章をどのくらい読みますか？

a. 読む頻度

ほとんど読まない		たまに気が向いたら読む		数日に1度読む		毎日読む
1	2	3	4	5	6	7

b. 読み方

見出しだけ見る（記事は読まない）		気になる記事だけななめ読み（飛ばし読み）		重要だと思う記事はきちんと読む		時間をかけてじっくり読む
1	2	3	4	5	6	7

4 通常（試験前など、時間の余裕がない時を除く）、日本語で新聞をどのくらい読みますか（インターネットを含まない）？

a. 読む頻度

ほとんど読まない		たまに気が向いたら読む		数日に1度読む		毎日読む
1	2	3	4	5	6	7

b. 読み方

見出しだけ見る（記事は読まない）		気になる記事だけななめ読み（飛ばし読み）		重要だと思う記事はきちんと読む		時間をかけてじっくり読む
1	2	3	4	5	6	7

5 通常（試験前など、時間の余裕がない時を除く）、日本語で雑誌（週刊誌・月刊誌）をどのくらい読みますか？

ほとんど読まない		たまに気が向いたら読む		数日に1度読む		毎日読む
1	2	3	4	5	6	7

6 通常（試験前など、時間の余裕がない時を除く）、日本語でマンガをどのくらい読みますか？

ほとんど読まない		たまに気が向いたら読む		数日に1度読む		毎日読む
1	2	3	4	5	6	7

図２．文章理解力を問う設問一覧

B. あなたの文章読解力（日本語現代文）についてお尋ねします。

7 本や新聞など、文章を早く読める方だと思いますか？　例えば、200ページ程度の文庫本ならどの位で読み終えますか？

1日以上かかる		半日で読める		数時間で読める		1～2時間で読める
1	2	3	4	5	6	7

8 本や新聞・雑誌などの文章を読むとき（マンガを除く）、理解力がある方だと思いますか？

普通の内容でも1度では理解できないことがある		内容が複雑だと、2度以上読む必要があることが多い		内容が複雑だと、たまに2度以上読む必要がある		1度読めばだいたいのところは理解できる
1	2	3	4	5	6	7

9 大学入学前に受けた文章読解の試験では（古典・漢文を除く）、どのくらいの得点をとっていましたか？

a. センター試験（現代文に限った得点率）

4割前後	5割以上	6割以上	7割以上	8割以上	9割以上	ほぼ満点
1	2	3	4	5	6	7

b. 全国規模の模擬試験（現代文に限った得点率）

4割前後	5割以上	6割以上	7割以上	8割以上	9割以上	ほぼ満点
1	2	3	4	5	6	7

設問Ａ２の文庫本の読書量については「１年で１～２冊以下」から「１～３日で１冊」までの７段階評定とし、その他のインターネット・新聞・雑誌・マンガの読書量については、それぞれ、「殆ど読まない」から「毎日読む」までの７段階評定とした。

文章理解力を問う図２の４つの設問のうち、設問Ｂ９ａとＢ９ｂは大学入学以前の文章理解力を問う設問であるが、 模擬試験や大学入試の得点率は高校入学時よりも大学入学時の文章理解力に近いと考えられる。また、本調査の参加者が平均年令約19歳と、大学に入学して１年前後であることから、大学入学時の文章理解力との間に大きな隔たりはないだろうという想定の下に、設問Ｂ９ａとＢ９ｂを調査参加者の現在の文章理解力を測る指標のひとつとして採用した。

上記（３）と（４）の他には、ジャンルに係わらず読書がどの程度好きであるかを問う設問を加えた（設問Ａ１）。なお、図１中の設問Ａ３ｂと設問Ａ４ｂについては、調査２に関係する設問であるため、次節において述べる。

結果は、主に参加者が回答した評定値同士の相関関係を測ることによって分析する。特に、読書媒体に関する設問の評定値と、文章理解力に関する設問の評定値との間の相関関係を見ることにより、上記（１ａ）であげた調査１の調査課題について考察することができる。

結果　各設問の平均評定値をまとめたものが表１である。この表より、調査参加者は、読書が「どちらかと言えば好き」であり、文庫本だと平均して「１～２ヶ月で１冊」程度読んでいることがわかる。その他の読書媒体では、インターネットで文章を

表１．現在の読書習慣と文章理解力の平均評定値　(n=80)

		読書習慣（設問Ａ）					文章理解力（設問Ｂ）			
	A1 好き嫌い	A2 文庫本	A3 ネット	A4a 新聞	A5a 雑誌	A6 マンガ	B7 スピード	B8 理解度	B9a センター	B9b 模擬試験
平均	5.43	2.93	6.09	2.93	3.33	3.36	3.46	4.46	4.30	4.01
SD	1.35	1.64	1.40	1.89	1.61	1.79	1.68	1.20	1.17	1.12
N	80	80	80	80	80	80	80	80	73	74

＊平均値は, 数字が大きいほど読書頻度・文章理解力が高いことを示す(min:1, max:7)。

読む頻度が一番高く、「毎日」ではないがそれに近い頻繁で目を通している。逆に新聞・雑誌・マンガなどは、「たまに気が向いたら」読む程度であった。Ａ3からＡ6までの4項目は設問の文言が同一であるため、比較が可能である。分散分析の結果、4つの読書媒体には有意差が認められた（$F(3,186)=19.22$　$p<.001$）。多重比較（Bonferroni）では、インターネットの読書頻度が他の3つの媒体の読書頻度を圧倒しており（全て$p<.001$）、新聞・雑誌・マンガの間の読書頻度に違いは見られないことがわかった（全て$p>.74$）。

次に、項目間の相関関係を表2に示した。この表から、（i）　読書習慣を問う項目間の相関関係、（ii）　文章理解力を問う項目間の相関関係、そして最後に、（iii）　読書習慣を問う項目と文章理解力を問う項目の間の相関関係の、３つが明らかになる。項目が多いので、ひとつひとつを分けて見てみたい。なお、読書の好き嫌いを問う設問Ａ1は、読書習慣のひとつとして扱うこととする。

まず読書習慣を問う項目間の相関関係について述べる。ジャンルに係わらない読書の好き嫌いと有意な相関関係が見られたのは、小説などの文庫本の読書量とマンガの読書量であった。ただし後者との相関は比較的弱かった（$r<.4$）。つまり、読書好きな学生は小説を多く読む傾向にあり、マンガも多少は読んでいるということがわかる。しかし、雑誌や新聞、インターネットのブログなどは、読書好きかどうかとは関係がないことがわかった。さらに、読書媒体間の相関関係を見てみると、有意差が見られたのは文庫本と新聞の読書量、そして文庫本とマンガの読書量で、どちらも比較的弱い相関係数であった。つまり、小説を多く読む人は、どちらかと言えば新聞やマンガも多く読んではいるが、この関係はあまり強くないことを示唆している。

表2．現在の読書習慣と文章理解力の相関関係　（n=80）

		読書習慣					文章理解力			
	好き嫌い	文庫本	ネット	新聞	雑誌	マンガ	スピード	理解度	センター	模擬試験
好き嫌い	–									
読書量										
文庫本	.54**	–								
ネット	.12	.03	–							
新聞	-.03	.24*	-.04	–						
雑誌	-.04	-.15	.04	.03	–					
マンガ	.24*	.31**	.20	.07	-.17	–				
文章理解力										
スピード	.53**	.48**	.07	-.05	.06	.23*	–			
理解度	.46**	.40**	.12	.02	.06	-.01	.43**	–		
センター	.27*	.12	.11	.04	.23*	-.07	.28*	.27*	–	
模擬試験	.40**	.26*	.04	.23*	.15	-.04	.43**	.34**	.55**	–

p < .05 = ＊，　p < .01 = ＊＊

次に、文章理解力を問う項目間の相関関係はどうだろうか。文章理解力を問う項目同士の比較は、全ての組み合わせが有意な結果となった。しかし、ある程度（r>.4）の相関係数が得られたのは読むスピードと理解度の関係、読むスピードと模擬試験の得点率の関係、そして模擬試験の得点率とセンター試験の得点率の関係の、3つであった。ここから言えることは、文章を読むスピードが速いと自分で感じている学生は、文章理解力もあると感じており、また模擬試験での得点率も高かった。また、模擬試験での得点率が高い学生は、センター試験での得点率も高かったということである。つまり、それぞれの相関性に散らばりはあるが、どの比較にも有意差が見られた点で、これら4つの設問は現在の文章理解力を問う上で妥当性が高いと言える。

最後に、読書習慣を問う項目と文章理解力を問う項目の間の相関関係について述べる。有意な相関関係は多く見られたが、一定以上（r>.4）の相関関係を示した組み合わせは、読書の好き嫌いと文章理解力（スピード、理解度、模擬試験の得点率）の3つと、文庫本の読書量と文章理解力（スピード、理解度）の2つ、合計5つの組み合わせであった。つまり、読書好きである方が文章理解力は高く、また小説を多く読む学生ほど文章理解力が高かったと言える。さらに、読書好きかどうかを問う方が、小説を多く読むかを問うよりも、文章理解力との関連性が明確になることもわかった。その一方で、読解力との相関関係が全く観察できなかった設問もある。インターネット等での読書量である。今回の調査においては、インターネットでどれほど多く文章を読んでいても、文章理解力には反映されていないことがわかった。

3.3 調査2：調査内容と結果

ここでは、新聞やインターネットにおいて、精読や飛ばし読みなどの読み方の違いが、文章理解力とどのように関係しているのかについて調査した。

調査参加者　調査1と同じ80人が参加し、調査1と同じ時間内に調査2が行われた。

調査項目　インターネットや新聞の読書量とその読み方について問うことができるように、下の（5）に示す項目についてアンケートの設問を用意した。右側の設問番号は、実際のアンケートにおける設問の番号と対応している（図3）。これらは、調査1で示した図1中の設問A3abやA4abと同一である。なお、読み方を問う設問A3bと設問A4bでは、「見出しだけを見る」から「時間をかけてじっくり読む」までの7段階評定を設定した。

（5）読解力の指標：

a．インターネットの読書量　　（設問3a）

b．インターネットの読み方　　（設問３b）
c．新聞の読書量　　（設問４a）
d．新聞の読み方　　（設問４b）

図３．読み方を問う設問一覧

3 通常（試験前など、時間の余裕がない時を除く）、携帯やインターネットで記事やブログなど、日本語で文章をどのくらい読みますか？

a. 読む頻度

殆ど読まない		たまに気が向いたら読む		数日に1度読む		毎日読む
1	2	3	4	5	6	7

b. 読み方

見出しだけ見る（記事は読まない）		気になる記事だけ ななめ読み（流ぱし読み）		重要だと思う記事は きちんと読む		時間をかけて じっくり読む
1	2	3	4	5	6	7

4 通常（試験前など、時間の余裕がない時を除く）、日本語で新聞をどのくらい読みますか（インターネットを含まない）？

a. 読む頻度

殆ど読まない		たまに気が向いたら読む		数日に1度読む		毎日読む
1	2	3	4	5	6	7

b. 読み方

見出しだけ見る（記事は読まない）		気になる記事だけ ななめ読み（流ぱし読み）		重要だと思う記事は きちんと読む		時間をかけて じっくり読む
1	2	3	4	5	6	7

表３．インターネットや新聞等の読み方と文章理解力の相関関係（*n*=80）

	ネット		新聞		文章理解力			
	読書量	読み方	読書量	読み方	スピード	理解度	センター	模擬試験
ネット								
読書量	−							
読み方	.41**	−						
新聞								
読書量	−.04	−.02	−					
読み方	−.19	.02	.42**	−				
文章理解								
スピード	.07	.04	−.05	.18	−			
理解度	.12	.14	.02	.03	.43**	−		
センター	.11	.18	.04	.00	.28*	.27*	−	
模擬試験	.04	.19	.23*	.22	.43**	.34**	.55**	−

$p < .05$ = ＊，　$p < .01$ = ＊＊

結果　図3の評定の結果を、調査1で得た文章理解力を問う設問の評定結果と合わせ、相関関係を示したのが表3である。全体的に有意な相関関係を示す組み合わせは少ない。その中でも、ある程度（r>.4）の相関があったものは、インターネット等での読書量とその読み方、新聞の読書量とその読み方のふたつのみで、読み方と文章理解力との間には相関が確認できなかった。つまり、インターネットや新聞を多く読む人ほど記事をじっくり読んでいる傾向があるが、そのことが文章理解力に反映しているわけではないということがわかった。

3.4 調査3：調査内容と結果

ここでは、大学入学前の読書習慣は、大学生の読書経験や文章理解力とどのように関係しているのかについて調査した。

調査参加者　調査1と調査2に参加したうちの、63人が本調査に参加した。調査3は、追加調査という形で、前のふたつの調査から約2ヶ月後に実施した。

調査項目　大学以前の読書習慣がわかるように、（6）に示した4問を設問として用意した。右側の設問番号は、実際のアンケートにおける設問番号と対応している（図4）。調査1と調査2の結果から、新聞や雑誌といった読書媒体毎に項目を分ける必要性が低いことがわかったので[1]、繁雑さを避けるためにも「どの程度本を読んでいたか」という問い方で統一をした。また、大学における読書量との比較が可能なように、同じ表現で設問A4を設けた。全ての設問が、「全く読んでいなかった」から「ほとんど毎日何かを読んでいた」までの7段階評定となっている。

（6）大学入学以前の読書習慣の指標：

a．高校生の時の読書量　（設問A1）
b．中学生の時の読書量　（設問A2）
c．小学生の時の読書量　（設問A3）
d．現在の読書量　（設問A4）

1　高校の時の新聞を読む頻度とその読み方についても追加調査を行い，現在の文章理解力と比較した。しかし，両者の間に有意な相関関係は認められなかったので，紙幅の都合によりここでは記述を省略する。

図４．過去の読書習慣を問う設問一覧

A あなたの今までの読書習慣についてお尋ねします。

1 高校生の時、どの程度本を読んでいましたか？

全く読んでいなかった		あまり読んでいなかった		良く読んでいた方である		ほとんど毎日何かを読んでいた
1	2	3	4	5	6	7

2 中学生の時、どの程度本を読んでいましたか？

全く読んでいなかった		あまり読んでいなかった		良く読んでいた方である		ほとんど毎日何かを読んでいた
1	2	3	4	5	6	7

3 小学生の時、どの程度本を読んでいましたか？

全く読んでいなかった		あまり読んでいなかった		良く読んでいた方である		ほとんど毎日何かを読んでいた
1	2	3	4	5	6	7

4 今、どの程度本を読んでいますか？

全く読まない		あまり読まない		良く読んでいる方である		ほとんど毎日何かを読んでいる
1	2	3	4	5	6	7

結果　調査１と調査２で使用した、文章理解力の指標を、図４の回答と比較して、その相関関係を調べた。結果を表４と表５に示す。まず表４は、各時期の平均評定値を中心に整理したものである。平均値からわかるように、読書の頻度は小学校時代が最も高い。続いて中学校時代、高校時代と、年令を重ねる毎に頻度が少なくなっていき、高校と現在の大学時代との間は殆ど差が見られない。この読書頻度の推移について、時期を独立変数に、評定値を従属変数に置いた分散分析を行ったところ、有意差が確認された（$F(3,186)=19.22$　$p<.001$）。多重比較（Bonferroni）の結果、高校時代と大学の評定間には有意差が見られなかったが（$p>.99$）、小学校時代と中学校時代（$p<.001$）、そして中学校時代と高校時代の間（$p=.02$）には有意差が確認された。つまり、読書の頻度は小学校から高校に至るまで下がり続け、高校になってこの低下が止まったと言える。ただし、小学生と高校生が同じ時間に読める量は同じとは考えにくいので、ここで言う頻度はあくまで習慣としての読書のことで、読む量を比較しているわけではないことに注意が必要である。

次に、各時期の読書習慣の相関関係を求めたところ（表５）、異なる時期の中で、高校時代の読書習慣が、他の時期の読書習慣と最も強い関係性を示していることがわかった。まず、小学校時代の読書習慣と有意な相関関係にあったのは、中学校での読書習慣と高校での読書量だった。特に、小学校と中学校時代の間には強い相関関係が確認された（$r=.65$）。中学校時代の読書習慣と有意な相関関係にあったのは、小学校での読書量と高校での読書量で、特に後者との間に強い関係が示された（$r=.72$）。高校時代の読書習慣との相関関係は、小学校・中学校・現在と、全ての組み合わせで

有意差が確認され、特に強い相関は中学時代の読書習慣との関係であった（r=.72)。一方、現在（大学）での読書習慣と相関関係にあったのは高校での読書習慣だけであった（r=.43）。これらから、高校時代の読書習慣が、他の時期の読書習慣と最も強い関係性を示していると結論づけることができる。また、大学における読書習慣は高校時代としか相関していなかったことから、小学校や中学校における読書習慣からの直接的な連続性が薄いことがわかる。

表 4　過去の読書経験の平均評定値（n=63)

	小学	中学	高校	現在
平均	4.78	4.08	3.63	3.43
SD	1.48	1.59	1.34	1.25
N	63	63	63	63
多重比較	＊＊	＊	*N.S.*	

p < .05 = ＊,　p < .01 = ＊＊

＊平均値は, 数字が大きいほど読書頻度・文章理解力が高いことを示す(min:1, max:7)。

表 5　過去の読書経験と文章理解力の相関関係（n=63)

	読書量						文章理解力			
	1. 小学	2. 中学	3. 高校	4. 現在	1+2+3	1+2+3+4	スピード	理解度	センター	模擬試験
読書量										
1. 小学	−									
2. 中学	.65**	−								
3. 高校	.38**	.72**	−							
4. 現在	.07	.23	.41**	−						
1+2+3	.80**	.94**	.81**	.27*	−					
1+2+3+4	.73**	.89**	.83**	.53**	.96**	−				
読解力										
スピード	.35**	.51**	.50**	.31*	.53**	.55**	−			
理解度	.45**	.30*	.27*	.26*	.40**	.43**	.43**	−		
センター	.21	.34*	.43**	.08	.38**	.36**	.28*	.27*	−	
模擬試験	.31*	.44**	.50**	.37**	.48**	.53**	.43**	.34**	.55**	−

p < .05 = ＊,　p < .01 = ＊＊

さらに、小学校から高校までの各時期の評定合計値を各時期と比べてみると（表5中の“1＋2＋3”）、現在の読書習慣を除いて、他のどの時期とも非常に強い相関関係が表れている（r>.7）。同様に、小学校から現在までの時期の評定合計値を各時期と比べてみると（“1＋2＋3＋4”）、現在の読書習慣との間には中程度の相関関係が（r>.4）、その他の各時期との間には非常に強い相関関係が確認された（r>.7）。これらの結果から、小学校から現在までの各時期と、強い相関関係を示すのは高校時代の読書習慣であり、さらに一貫して強い関係を示すのは、全ての時期を足した評定合計値（小学校から現在までの合計）であることがわかる。

最後に、各時期における読書習慣と文章読解力との相関関係はどうだろうか。結論から言うと、文章読解力と最も強い関係を示したのは、各時期の評定値を足した評定合計値であった（小学校から高校までの合計、または小学校から現在までの合計）。文章理解力を測る設問4項目のうち、小学校時代の読書量と一定以上（r>.4）の有意な相関関係が見られたのは1項目のみ（理解度）であった。中学校時代の読書量では2項目（読むスピード・模擬試験の得点率）、高校時代では3項目（読むスピード・センター試験の得点率・模擬試験の得点率）、現在では0項目という結果だった。一方、文章理解力と全ての時代の評定合計値を比較すると、小学校から高校までの合計も小学校から現在までの合計も共に、3項目（読むスピード・理解度・模擬試験の得点率）との間に一定以上の有意な相関関係が見られた。高校時代での読書量と文章理解力の関係も、3項目との間で一定以上の相関関係が見つかったが、評定合計値との関係の方が、相関係数が若干高いことが表4からわかる。つまり、文章理解力と最も強い相関関係を示したのは全ての時代の評定合計値だったと言える。

以上のことから、次の3つのことがわかる。すなわち、（ⅰ）小学校から高校にかけて読書頻度は低下するが、その後大学にかけて安定する、（ⅱ）高校時代の読書習慣は、他の各時期の読書習慣と相関関係が高い。逆に他の時期との相関関係が最も弱いのは大学での読書習慣である、（ⅲ）現在の文章読解力と深いつながりがあるのは高校時代の読書習慣である。しかし、各時代の読書習慣を総合すると、文章読解力とのより深いつながりが示される。

4．考　　察

本稿は、大学生の読書習慣と文章理解力の関係について、3つの調査を通して論じてきた。3節の（1）と（2）で示した3つの調査課題と予測を、今一度確認しておく。

（7）a．調査1：読書の種類が多様化している現在、読書媒体の違いは、大学生の

読書習慣や文章理解力とどのように関係しているかを調べる。
→予測：大学生は、読書量が多いほど、文章理解力も高いだろう。

b．調査2：新聞やインターネットにおいて、精読や飛ばし読みなどの読み方の違いは、文章理解力とどのように関係しているかを調べる。

c．調査3：大学での読書習慣は、大学入学前の読書習慣や文章理解力とどのように関係しているかを調査する。
→予測1：個人の読書習慣が小学校から大学まで一貫したものであるなら、大学生の文章読解力は高校以前の読書頻度とも比例しているだろう。
→予測2：もし大学入学後に読書量が減少する傾向があるなら、文章理解力は、大学での読書量よりも、高校以前の読書習慣との方がより深い関係があるだろう。

そして調査の結果、次のようなことがわかった。

（8）調査1の結果：

a．インターネット、新聞、雑誌、マンガの中で、大学生はインターネットを毎日に近い頻度で読むが、新聞・雑誌・マンガは気が向いたときに読む程度である。

b．読書が好きな学生は、小説などの文庫本を多く読んでいる。新聞・雑誌・マンガ・インターネットでの読書は、読書好きであることとは全く関係がないか、弱い関係しかない。

c．文章理解力と最も関係が深いのは読書好きかどうかと、小説などの文庫本を多く読むかどうかだった。つまり、読書が好きな学生と文庫本を多く読む学生は、文章理解力が高い傾向にあった。その一方で、インターネットでの読書量は、文章理解力とは全く関係が見いだせなかった。

（9）調査2の結果：

新聞やインターネットを精読するか飛ばし読みするか等の読み方の違いと、大学生の文章理解力との間に相関関係は見つけられなかった。

(10) 調査3の結果：

a. 小学校から高校にかけて読書頻度は低下し続け、大学で下げ止りとなる。

b. 高校時代の読書習慣は、他の各時期の読書習慣と相関関係が高い。逆に他の時期との相関関係が最も弱いのは大学での読書習慣である。

c. 大学での文章理解力と深いつながりがあるのは高校時代の読書習慣である。しかし、各時代の読書習慣を総合すると、文章理解力とのさらに強いつながりが示される。

調査1の結果（8）から、大学生は雑誌や新聞よりも、インターネットで多く情報を得ていることがわかった。これは、米国の大学生を調査したGallik（1996）による、雑誌に目を通す頻度が一番高く、新聞、インターネットの順番で読書頻度が下がるという報告とは、大きく異なる結果であった。Gallik（1996）の報告から既に15年が経過し、インターネットの発達と普及が読書習慣を大きく変えていることがわかる。

しかし、インターネットの読者は、「読書好き」かどうかということとは、無関係であった。「読書好き」という括りから引き出されるのは、むしろ小説などの文庫本によく親しむ読者であることがわかった。高い読書頻度とは裏腹にインターネット読書が「読書好き」と無関係であったのは、インターネットは読書欲を満たすためよりも、情報の取得を目的としていたり、文字と同時に写真や動画も見ている場合が多いことが理由として考えられる。いずれにしても、このことは、マンガ、インターネットや携帯小説など、様々な読書の形が認知されてきた現在にあっても、小説などの文庫本が果たす役割の大きさを物語っていると言える。

また、いろいろな読書媒体の中で、文章読解力と小説との間にのみ強い相関が見られたことは興味深く、（7a）の予測を部分的に支持している。しかしこれは、新聞や雑誌などが文章理解の向上に全くつながらないということではなく、その効果が比較的弱いと考えるべきかも知れない。新聞や雑誌の読書量は、それぞれ模擬試験やセンター試験の得点率と、高くはないが弱い相関が見られたからである（表2）。文庫本なら、一冊を読み終えるまで集中して長い時間読み続けることが考えられるが、新聞やインターネットの文章を、文字だけ長く読み続けるということは、あまり日常的でないように思われる。例えばインターネットの場合、音楽や動画といった、非言語情報の取得も文字を追いながら同時に行うことができる。その結果、新聞やインターネットは小説等の文庫本に比べて、目を通すべき活字の量が相対的に少なくなるだろう。このような読書媒体の性質の違いによって、新聞やインターネットの方が文章理解力の向上に資する効果が表れにくいのかも知れない。

次に、調査2の結果（9）からは、新聞やインターネットの読み方（精読や飛ばし読み）の違いが、文章理解に影響を与えないということがわかった。これには2つの解釈が可能だ。ひとつは、調査1でわかったように、新聞やインターネットを多読すること自体が理解力との相関を意味しないので、記事の読み方の違いと読解力との間の関連性も見いだしにくいという理由である。もうひとつの解釈は、精読か飛ばし読みかの違いは、全容を詳しく知りたいか大筋だけを知りたいかに応じた読書の目的の違いにすぎず、読解力のあるなしとは元来関連性の薄いものかも知れないという考えである。[2]

調査3では、大学での読書習慣と高校以前の読書習慣を比較したが、（7c）の予測は完全には支持されなかった。まず、小学校から高校にかけて読書頻度が低下してその後大学で下げ止りを見るという本研究の結果は、読書習慣が各時代を通して一貫し

ているとは言えず（予測１）、また大学入学後に大きく変わったとも言えない（予測２）点で、予測の前提が結果と合致していなかったと言える。

しかし、本研究の結果は、大学生の読書習慣は大学入学以前に確立されるという先行研究の知見と（Gallik, 1996; 平山, 2003）、大きく矛盾するものではなかった。本結果では大学生の読書習慣は高校時代としか相関が見られなかったので、大学での読書習慣は直接には高校での読書習慣としか関連していないと言える。しかし、高校生の読書習慣はそれ以前の中学や小学校の時の読書習慣と強く相関していることから、小中高校の全ての読書習慣が、直接および間接的に大学生の読書習慣に影響を与えていると考えることができるだろう。

最後に、平山（2003）やこれまでの調査では触れられておらず、本結果でわかったことは、文章理解力と読書経験との関係についてである。文章理解力は、特定の時期をあげるならば、高校時代の読書習慣と深い関係が認められた。しかし、小学校から大学（または高校）までの読書習慣の評点を総合したものを指標とした場合、さらに強い文章理解力との相関を確認することができた。このことは、読書習慣そのものは小学校から大学まで一貫していないとしても、過去から現在に至る各時期の読書経験が紡ぎ合わされるように読書習慣を作り上げ、その結果として文章理解力に影響を及ぼす力となっているからだと言えるだろう。

５．むすび

本稿は、大学生の読書習慣と文章理解力の関係について、小学校から高校までの読書経験も考慮に入れながら論じてきた。本稿が明らかにしたことの中から主なものをまとめると次の３点となる。すなわち、ⅰ）大学生は日常的にかなり高頻度でインターネットから文章を読んでいるが、読書好きであることや文章理解力の高さと相関が強いのはインターネット・雑誌・新聞・マンガではなく小説などの文庫本の読書量である；ⅱ）新聞やインターネットの記事を精読するか飛ばし読みするかというような読み方は、文章理解力とは相関が見られない；ⅲ）各人の読書習慣は小学校から大学まで一貫して同じではないが、各時期の読書習慣を総合して文章理解力と比較したとき、（それぞれの時期毎に比較するよりも）両者の間に強い相関関係が見られる。これらのことから、読書の媒体が多様になってきても、好きだから読む本と、情報を得るた

2　ただし，Carver（1990; 1997; 2000）は，斜め読み（scanning）や精読の違いは，読む目的の違いだけでなく，情報処理のしくみも異なるとしており，最も処理負荷が低いのは斜め読みであると述べる。これに従えば，新聞等を丁寧に読む方が飛ばし読みよりも処理負荷が高いと推察でき，普段から負荷の高い文処理（精読）に馴れている読者は，そうでない読者と比べて文章理解力が高まるという予測も成り立つ。本調査では新聞などの読み方による差異は確認できなかったが，異なる調査方法を用いることで，何らかの違いが表れる可能性は否定できない。

めに読む新聞や雑誌との違いが、文章理解力の違いとなって表れたことが示唆された。また、読書習慣は小学校から大学まで一貫した形では表れなかったが、文章理解力との関係においては、過去の一時期の読書習慣よりも、過去から現在の全ての読書習慣がひとつになって、読む力に結びついていることが示された。

しかし、本稿では深く議論できなかったこともいくつかあった。まず、文章理解力の指標のひとつとして用いた模擬試験やセンター試験の得点率が、調査時点での参加者の読解力とどの程度同一であるのかが充分には確認できなかったことである。本稿では、調査参加者の平均年令が約19歳であったことから、大学入学直前の読解力を大きく反映していると思われる入試や模擬試験の得点率と現在の読解力との間に、大きな違いはないと想定した。しかし、データの妥当性をさらに高めるためには、調査時における正確な文章理解力を測る他の手法も必要であろう。

また、大学における学年がさらに進んだ参加者の場合もまた、本調査と同じ結果を生むのかについては、本研究の結果からは言及ができない。本稿の調査参加者は高校を卒業して1，2年以内である場合が殆どであったため、過去の読書習慣からの影響が強かったとも解釈できる。専門書に触れる機会が増す上級生となるにつれて、過去の読書習慣からの影響が薄くなるのか変わらないのかという疑問については、今後の追調査を待たなければならない。

さらに、文章理解だけでなく、単文理解でも読書経験の違いが生まれるのかということも興味深い問題である。この点については、英語の関係節理解を扱った Wells, Christiansen, Race, Acheson, and MacDonald（2009）や、日本語の「が」格連続文等を扱った澤崎（2010）の研究から、単文理解と読書経験との関係性が指摘されている。しかし、体系的な知見の積み上げができるまでには及んでいない。このように、本稿は今回扱うことのできなかった課題や疑問を残したが、本研究での知見や問題点が今後の課題につながるような、研究の広がりに期待をしたい。

参考文献

Carver, R. P.（1990）. Reading rate: A review of research and theory. NY: Academic Press.

Carver, R. P.（1997）. Reading for one second, one minute, or one year from the perspective of Rauding theory. Scientific Studies of Reading, 1, 3-45.

Carver, R. P.（2000）. The cause of high and low reading achievement. Mahwah, NJ: Erlbaum.

鄭仁豪（2009）今求められる読書と読書教育　『読書科学』52（4），197-199.

府川源一郎（2009）読書概念の変容と読書教育　『読書科学』52（4），170-174.

Gallik, J. D.（1999）. Do they read for pleasure?: Recreational reading habits of college students. Journal of Adolescent & Adult Literacy, 42:6, 480-488.

平山祐一郎（2003）大学生の読書実態の分析：女子大学生を対象として 『読書科学』47:3, 99-107.

大塚英志・ササキバラゴウ（2004）『教養としての＜まんが・アニメ＞』 講談社.

澤崎宏一（2010）文理解における個人差 言語科学会第12回年次国際大会予稿集（p. 167）.

Stanovich, K. E., & Cunningham, Anne E. (1992). Studying the consequences of literacy within a literate society: The cognitive correlates of print exposure. Memory & Cognition, 20 (1), 51-68.

Stanovich, K. E., & Cunningham, Anne E. (1993). Where does knowledge come from?: Specific associations between print exposure and information acquisition. Journal of Educational Psychology, 85 (2), 211-229.

Wells, J. B., Christiansen, M. H., Race, D. S., Acheson, D. J., & MacDonald, M. C. (2009). Experience and sentence processing: Statistical learning and relative clause comprehension. Cognitive Psychology, 58 (2), 250-270.

West, R. F., & Stanovich, K. E. (1991). The incidental acquisition of information from reading. Psychological Science, 2 (5), 325-330.